

觀音經和訓圖會

壹

八五
2676
1

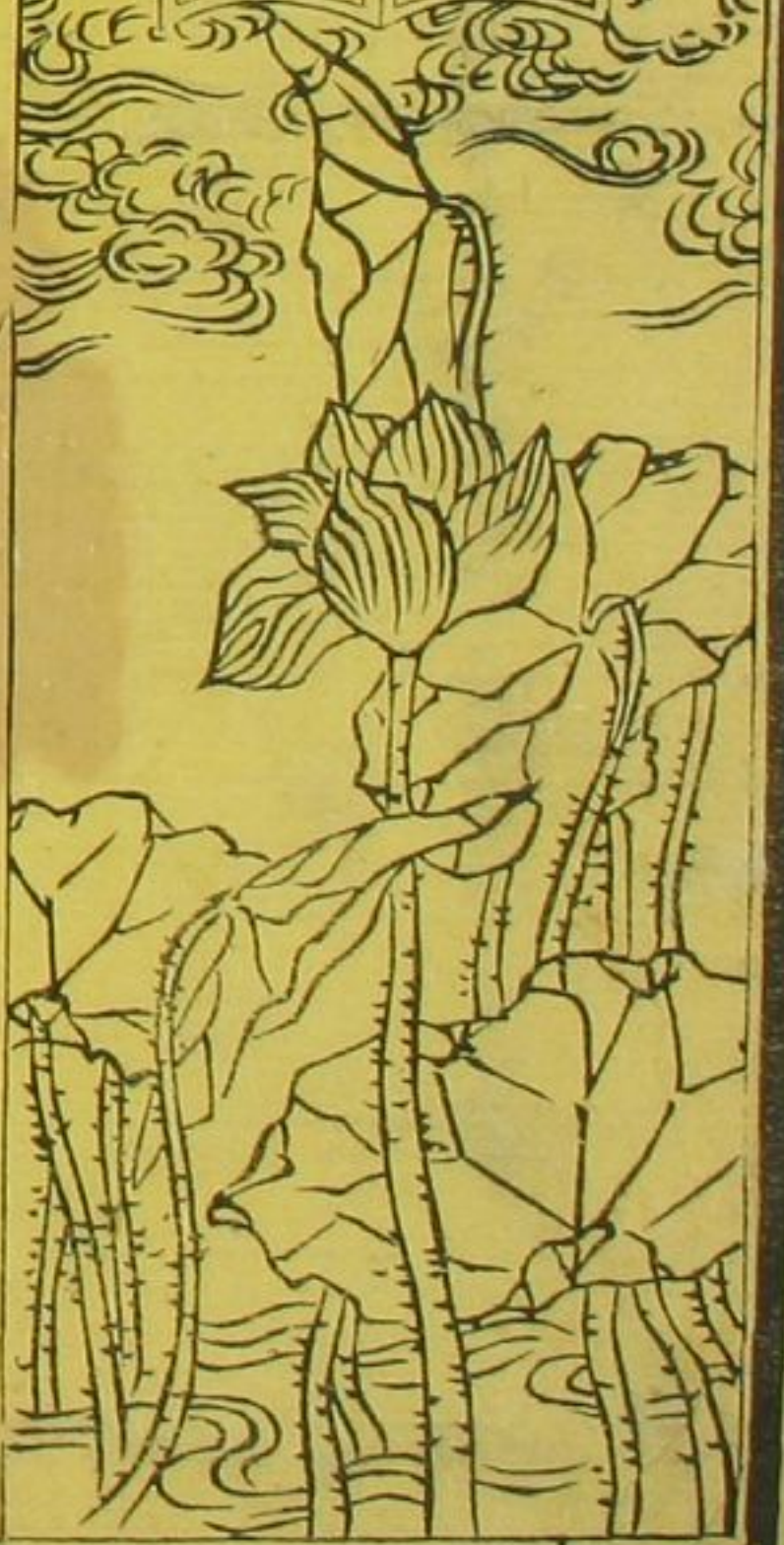


ハ5
2676
14

ハ5
2676

ハ5
7806
14

山田意齋叟迹
松川半山画



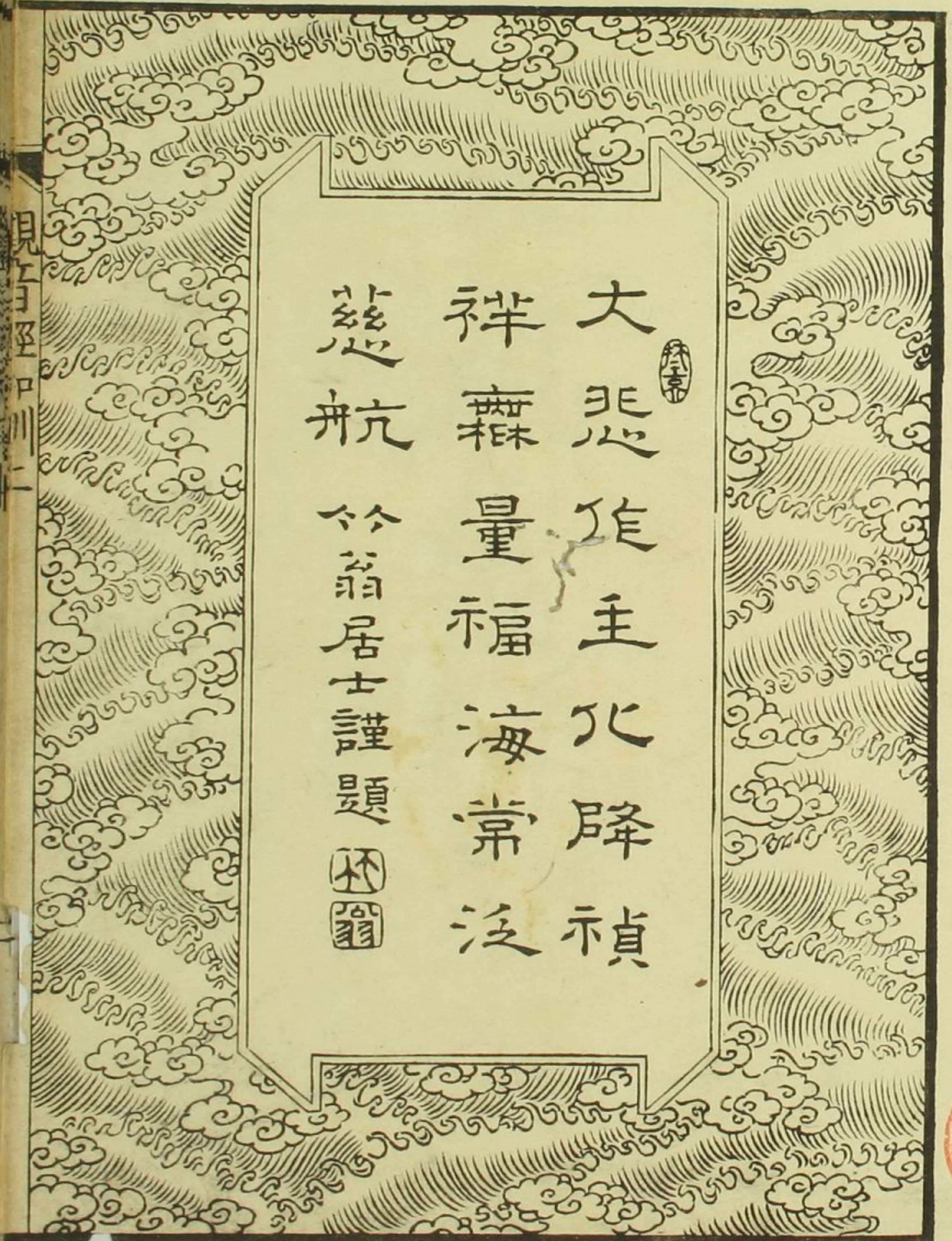
觀音經餘訓圖會 三冊

此書の法花經八卷の肉身及び普門品とあると決
観世主の廣大無量なる佛利益と云ふを以て
述なるを抄は廿八日本唐失坐す不及び何の國
土のりるとも念と念しなる人々大由後以洪る白海
比刀初も不破効の理及の依徳在正本文を續て知るべ

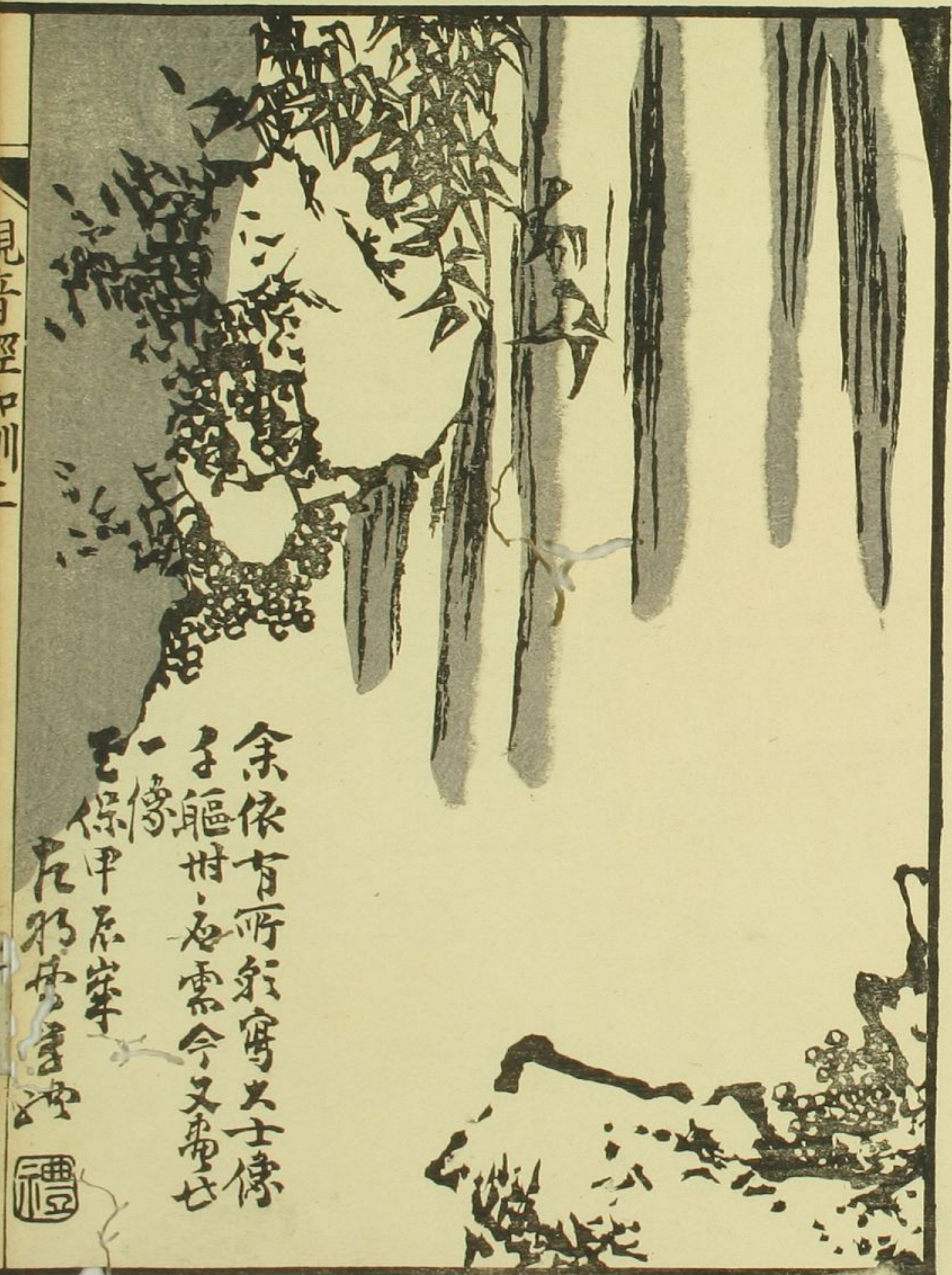
浪荳群玉堂
書林宋榮堂



大悲作主化降禎
祥霖量福海常泛
慈航
今翁居士謹題



見立五部中川二



余依有所叙寫此士像
子軀世之靈今又帶此
一像

保甲辰年
花乃長生



三十三の山ふもふもちて
自らとひて語り
世にすくあり 大綱

皇都紫野黄梅院現住

觀音經和訓圖會卷之上



題号

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

○妙法蓮華經といは法華經八卷二十八品の惣題号なり抑法華

經と申へ大思教主釈迦牟尼如来 釈迦如来の御妻ハ妻

於て八ヶ年の間小統の妙經也三世諸佛の本懐かれを聲聞 阿耨陀經の述す略之 靈鷲山小

菩薩天人龍神と首と無量の衆生利益ありてすといふはこれ 五逆の提婆達多も此御經の功力にて天王如来の記別ありて八歳乃

龍女も南方毒垢の正覺と唱へ佛も諸經の中の經王かといふ宜し梵 本天竺の乃法華經八卷數多く十六里の地敷満といひて

本あり

藏三藏の要心經の肝要の文符と拔華て八卷二十八品とせられり。此
 御經を蓮華經と号す。其の深妙の緒の草木の花は何
 とも麗しくも或は枝繁り葉茂く或は蔓あつて結がれ或は花と
 菓と時と遠く或は白潔く蓮華の泥の中より生れぬ泥の汚
 り染むは是清淨の妙法は緒の邪惡の碍られざる如く又花と菓と同
 時小きごと。是此經を續編とれ煩悩即善提の悟と開がごと。又
 蓮華の枝のあつて蔓のあつて一本の莖の二輪の花淨く咲り。是經の
 乘のあつて權教のあつて一佛大乘の妙法ゆて二もなり三もなり
 蓮華と以て題号とあり。最蓮華の中おも白蓮華の
 の。故奈何とあれ蓮華の四種あり梵名優鉢羅花といふ蓮

華ガの拘物頭花といふ黃蓮花なり鉢曇摩花といふ紅蓮花
 芬陀利花といふ白蓮花なり。其の白くもその色乃根本なり此經の
 緒經の根本なり。其の白く蓮花の喩の如く。緘の上代末の元生
 の機小服ひ行ひ易く物も其理遺る所なく。利益廣大を遍かり。この
 觀音經は法花經の中は第二十五品あり。六品ありと刻俗の二
 十五段目といふ。○觀世音菩薩といふ元正法明如来と申報身
 の佛と在り。元生を濟度せん。妙覺の位と辭し。菩薩の位
 小即南方世界普陀洛山に住し。觀の字は觀察の義ありて
 心もともきくとも。又思遺とも刻世間の變音の音と刻約てり。世
 間の音と觀といふ。世間の一切元生が音と出でて此菩薩を祈

念どれ其喜観大慈大悲の心とて流生の願と観念了らぐくそ
 願と叶のより観世音と号なり。猶観の二字小就て八種くむつれ
 鏡くわれも長を略と。此菩薩手小蓮花と持る。即ち妙法蓮
 花の蓮花なり。又寶冠小彌陀を戴た。即ち観音八因位乃其菩薩
 弥陀之果位の佛躰なり。因果一躰の理を示し。又尊形にて弥陀觀
 音本一躰之因花果菓めて花咲実と生と善と行ハ福来り惡とを
 禍來る是も因果一躰の理なり。蓮花の花菓ひく。萌ハ因果一躰
 乃理小服が由。観音大士是と持る。又佛ハ妙經の題号小用ひ。ハ之
 ○普門品ハ観音經一部の題なり。法華經二十八品とも皆をれ。ハ
 題号あり。或も方便品とハ或ハ壽量品とハ一段ハの題号なり。



其二十八品の中もも四要品よとて肝心の要文四品あり是人の身みの心壽しんじう
 目咽喉めくわんごうの喩ゆより先方便品せんべんべんを心こころす。壽量品じうりやうべんを壽いそと。安樂行品あんらくぎやうべん
 と同おなく。普門品ふもんべんを咽喉くわんごうと。心壽目咽喉しんじうめくわんごうと。肝要かんようなりと。取と
 分わて咽喉くわんごうを重おもく。其故そのゆゑハ食くわんの通とほひ息いきの出入でいりの咽喉くわんごうの主しゆなり
 なる。咽喉くわんごう塞ふさると心壽しんじう目咽喉めくわんごうも持もたず。故ゆゑハ此この觀音くわんおん經きやうハ法花ほふけ經きやう
 中の肝要かんよう中の肝要かんようなりと知しる。○普ふハもまねくと刻ときく廣ひろくとも
 日ひト義ぎなり觀世くわんぜ音おんハ普ふく十方じふじやう國土こくどハ種しゆの形かたちと現あらはれ一切いっけつ生せいと濟けの
 りあり。○門もんハ喩ゆふて家かハ門もんの有あり。觀音くわんおん善ぜん薩さつ大慈だいじ
 大悲だいひの惠めぐみと絶たつつ。○品ひんハ類るいなり又また志しと刻ときく
 法花ほふけ經きやう二十八部にじはちはつぶと何なにの品ひん其品そのひんと部類ぶるいと分わり。○策さくハ次第しだいの義ぎ

かり。○普ふ門もん品べんを觀音くわんおん經きやうと稱なづく。貴賤きせん僧俗そうじよくとも普ふく續編ぞくへんと
 更さらと多おほくハ現世げんぜの祈禱きととかり。○昔むかし中天ちてん空くうハ摩ま維い織しと
 以もつ沙門さもんあり。○普ふく緒經しゆきやうハ通とほじ。智ち才さい勝しやうと道德だうとく高たかく。○諸人しよじん
 推おしする。伊波いば勒りやく善ぜん薩さつと稱なづく。此この僧佛そうぶつ法ほふと弘ひろめん。○天竺てんぢくと立た
 て葱嶺そうりやう流沙りゅうさあり。○雜所ざつしよを凌しのぎ。○中ちゆう華かと。○西河さいがと。○所しよ到たうる。○
 其頃そのころ北京べいぎやうの王沮渠わうしよきよ蒙遜もうんそんと。○人にん癩病らいびやうを患あれ。○緒しゆの名医めいを迎むかへ。○作さく
 療手りやうてと。○普ふく露ろむ。○の驗けんも。○六件ろくけんの伊波いば勒りやくと緒しゆと。○癩らい
 病びやうの治ちと。○法ほふや有あり。○同おなく。○伊波いば勒りやく王わうの病相びやうしやうを。○日にち見けん前生ぜんせいの
 報むくひ。○ハ医い業ぎやうの力ちからあり。○治ちは。○法花ほふけ經きやうの中ちゆう普門ふもん品べんハ功徳くんとく
 廣大くわんたいと。○是こゝと續編ぞくへんと。○者しや觀音くわんおん善ぜん薩さつの利益りやくと。○蒙もうと。○ハ。

王信心を凝観音大士と念朝夕普門品を續誦し之を將
小業病平愈と誓し示す蒙遜の教に従ひは花経の中
より普門品を拔萃して信を凝し且暮念くも續誦し之を實
も観音之薩垂の御利益空しくも漸く小病忘る遂小平愈し
小蒙遜歡喜小堪む深く觀世音の佛恩と感し函中の函卷小
高札を立観音經を續誦すと誓れり万民小觸知めたるより諸
人皆普門品を讀誦し庇護を蒙る者敷を去ると是より諸國とも
觀音經を尊ぶる盛なり吾皇國も傳りて是を續誦し利益
と蒙る人古より今ふりて皆て拔萃し御経なり○此御経
と中華にて八名と周穆王經ともいふ其故を周の穆王八足の良駒

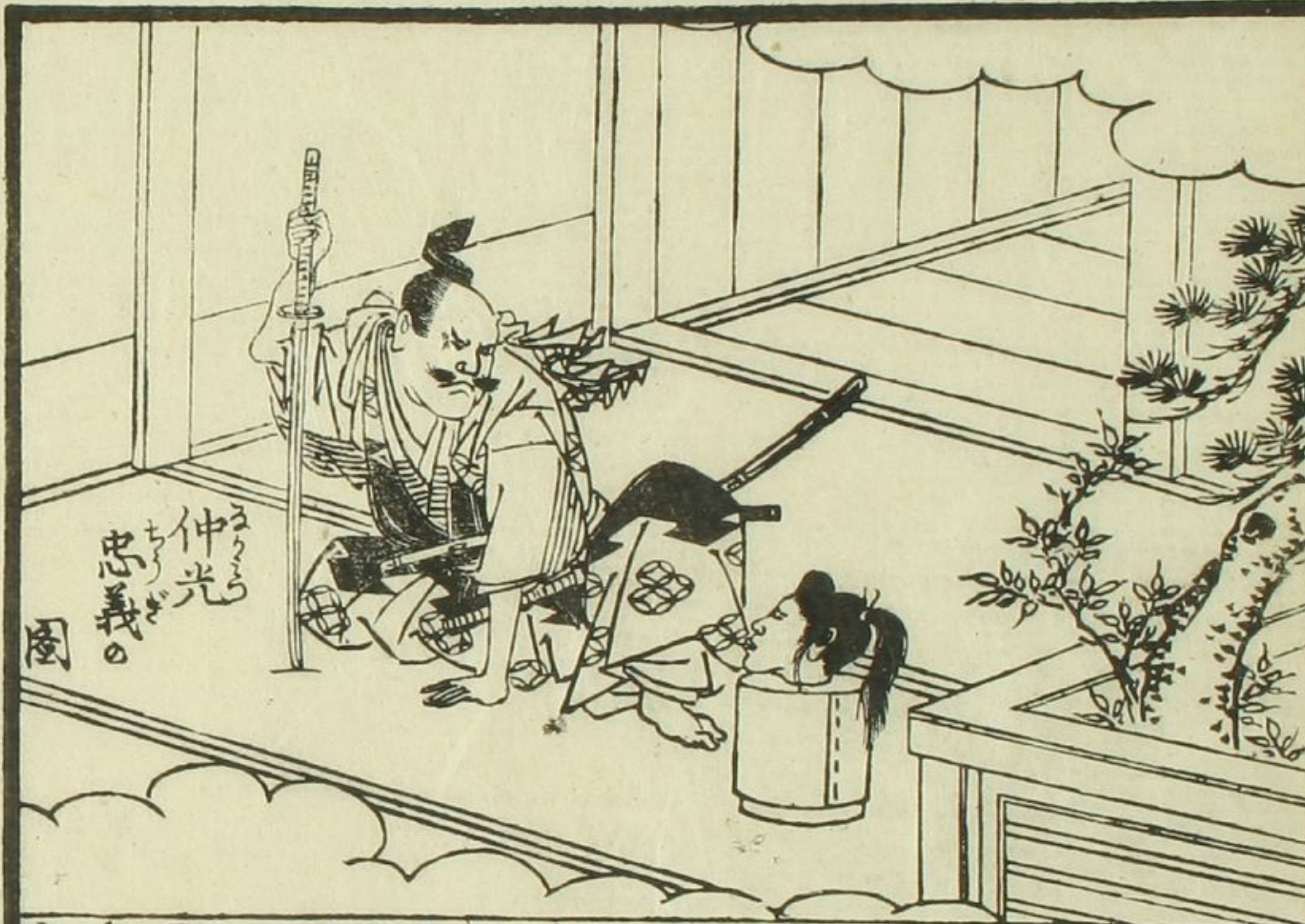
尔时无盡意菩薩即從座起

を得てこれ小抄兼普く四極八荒と往巡りたり或は天竺の無憂
山に到りて折節釈迦如来法花経を講じて御坐すれ穆王も會座
小着て聽聞せられたる小抄兼普く四極八荒と往巡りたり或は天竺の無憂
と以て普門品を説聞せし身と如来直説の漢語と云傳へ普門品を
周穆王經とも申と名猶穆王の普門品と授し小就て菊水傳授と
夷あり其下の卷小措く記と

○尔時と尔時との義なり是釈尊此普門品を説く前小法花経
の二十四品周東方の妙音菩薩の功德を説き既小妙音品畢て次小

南方觀世音菩薩の功徳を説くところの今時無盡意菩薩觀音の功徳を釈尊の向よりいふなり。初小念時といふ字を單にたり。往古源満仲公の末子美女丸故有て惠心僧都の法弟となり。ひる小僧都美女丸小普門品一卷と授て續習しめらる。小美女丸不日而普門品成暗記して續誦し。師小向ひて此經の前は何と申。師經のひやと問さるれば僧都美女丸の智を試さんと故意と此經の前は經文有るなり。と申されども美女丸色を平し。師は何より偽をのたまふや。此經の始小念時とあれど此經の前は如來の説の御經無念有るなり。すと難く。僧都せらるれば其才機を感じ。法花經八卷と取出て授のひいと。○因小曰。美女丸發心の因縁を尋る。小清和天皇弟六の皇子貞純親王乃

脚子と六孫王經基公と申其脚嫡男と左馬權頭満仲公とて撰例多田小在城去る。おれ世小多田満仲公と稱せり。此満仲公小四人の脚子あり。一と猶子満茂。二と頼光。三と頼親。四と美女丸なり。然る満仲公觀世音と深く信仰ありて何年四人の子れ中一人を出家させ觀世音小仕させんと。末子美女丸と日圓中山寺の善觀和尚の許へ預め。美女丸出家を嫌ひ佛經と學び。ひとと放逐の舉動多り。これ満仲公甚と怒り。后下藤原仲光小命に。急だ美女丸首を討て来れよと命。小仲光是と百般小練をせしめ。是非なく宿所小咬り。至君を討小忍び。二子幸壽丸との首を討て。美女丸の身代と。美女丸を助けて。出家得道のり。然るに勸め。密に惠心僧都の許へ頼。遣



々々小と美女丸遂小惠心僧都乃
 彼弟となり後名僧の誉とすあり
 ○無盡意菩薩東方不瞬世
 界の教主普眼如來の補所乃善
 薩なり此菩薩一切众生を教化
 する意盡く無依て無盡意と
 号す○菩薩八覺有情とも又
 道心も翻譯と猶後小委記す
 ○即從座起と即坐を起すと
 列從座起ハ從座起といふので

無盡意菩薩靈鷲山の會座在て八方の聽允と俱小如來の流
 法成聽居のいが如來已小音門品と鏡ふるのふ小時無盡意菩薩
 薩即ち座より起て佛に向ひ向を起さんと先礼の形となりとく
 偏袒右肩合掌向佛而作是言
 〇偏袒右肩と八祖のあつとと右
 肩ハ右の肩より右の肩と祖よりなり天竺にて主人ハ師小向ハ右
 先後座起て右の肩と祖を敬と是右の手ハ用成便むる手あれ
 〇何事おも御用あるを致さんと小意めて右の肩を祖なり震且我
 日本にてハ貴人の前て肩と祖無礼なりとて戒む天竺ハ相及なり

〇偏袒右肩と刻て心裏をあらう
 〇祖右肩と八祖のあつとと右
 肩ハ右の肩より右の肩と祖よりなり天竺にて主人ハ師小向ハ右
 先後座起て右の肩と祖を敬と是右の手ハ用成便むる手あれ
 〇何事おも御用あるを致さんと小意めて右の肩を祖なり震且我
 日本にてハ貴人の前て肩と祖無礼なりとて戒む天竺ハ相及なり

○合掌向佛と合掌と合して佛に向ひまゐるなり。是も天竺の礼式
 して掌と合して合掌と云ふ。是も手は左右二あり然るに両手を合
 して一と云ふは二心かたをを表をかり。○而作是言と而ハ助字
 又而もよむ。○作ハは言ともあるも創。是も作と云
 義小く作と云ふ言と幾もあつて次の句を起すなり。○叔始の念時
 とのより此而作是言とのより二三字ハ經家の語として此經文と記
 一切緒經より記憶して忘る。更なり。經と書記とを以て經家と云
 世尊觀世音菩薩以何因縁名觀世音

去るより

此の句を以て

是より無盡意菩薩釋迦如來觀世音の名の緒と向ふ語あり
 ○世尊とハ釈迦如來と云ふ語なり。世尊ハ十号の隨一ありて諸佛
 の通称なり。今釈迦如來ハ此娑婆世界の教主ありてまはれ
 世尊と崇中なり。殊小萬徳と具足しゆ。世間と利益。世の
 為小尊なり。を以て世尊と云ふ。○以何因縁名觀世音と
 ハ何の因縁にて觀世音と名なり。物と物と向ふ三種
 の問あり。○曰不解問これ其事と不知と問なり。○曰試問これ我ハ知と
 孔渠ハあつて事とやと然と不知負と問なり。○曰赴機問と云ふ
 我ハ知とも其座に居る人の未だ不知も有るを其の不知せんとい
 とい今無尽意の問と即ち赴機問なり。此菩薩中より觀音と

名る緇疾より知る人も八分の聴流亦音く觀世音と名る因縁を
 知る人も方便にて向ふあり。此末の向も皆此格と知る。○惣て
 一切の物も名と義理と躰と三つあり。喩む蜜柑とりの名なり。其義
 理ハ蜜のどく甘れ柑の蜜とりの其躰ハ肉を橘の種類なり。又
 利太郎ハ名なり。其義理ハ利兵衛の二男なり。利太郎と呼へ其躰ハ
 向を男なり。如此万物比皆名義躰の三つ具とる。是より更なる。然れ無
 善薩觀世音の名をとりて向ふ。義理も躰も向ふ。やと不審とする
 人も有る。唯識論ハ名詮自性と更あり。是名自ら性詮
 との義にて名を自ら義も躰もあらざるなり。抑名といふ文字ハ文と云
 字の下小口といふ字と添ふ。此字の心も喩む夜中ハ人来て門を叩く。維

とと向も名と各々其名成字を早
 維なりと其人の躰がまれるなり。依
 夕の下小口と添ふ。名と字と作り
 されむ無意善薩也。義躰乃
 ニツ成す。置觀音の名むるを聴
 元ふなり。かりて向のハ一なり
 ○因ふ曰。それ人間の其名とて。その
 義理と躰と。或自ら詮知。即ちこれ
 觀音の功なり。琴三絃鼓太鼓の
 音と觀て。翌日の天氣の晴曇と知



人の声を以て其人の喜々怒々病々壯健否や成知。列漆の人其足音を
 観ても其人を知るとは皆是觀音の功力あるがなり。されば佛も觀音の功
 徳と重んじて此御經を説顯しより。觀音の名号深く味ふべかり
 おつがらむとんいがさつ ぜんあん

佛告無盡意菩薩善男子

○佛八十号の二つて諸佛の通号なれども唯佛と許しよれ釈迦如来の脚
 更とて他の佛は上小名号と置所謂阿彌陀佛阿闍佛などの類たるを
 山といふを巖山祭といふを葵祭といふがごとし。○告つがらむと刻是釈尊の無
 尽意の問に答て告るがなり。○善男子とハ二説有ハ佛道修行の人を
 善男子といふハ觀世音と信仰と念ぶる人を善男子ともいふがなり。され

善とハ少くも邪なく正直にて人畜とも小憐れ恵を平た道と守と善
 とし。老子も善水のなり。万物と利と争ふ處たりと謂ふ。されば維も善
 なるを東と知らざる是と為らざる能はざる悪はあらぬ東と知らざる私の欲心小しと
 是を為者多し。適善と行つても是と自慢して人を誹賤める者あり。是悪
 戎飾て善ふをせざるも有或る只ハ聖人の教を轉じとも。親小ハ不孝他
 人ハ不義不て借る金銀と返さぬ族もあり。僧徒ハ猶多し。身ハ編
 緬呂紗の衣と著し金襴錦の袈裟と掛水晶の珠數とつまぐる只法語
 を唱起すも居おも念佛と外見まさも殊勝げふんあれも内心ハ佛經
 の意味成も了解せんもせず。能と嫉と賢と誇り強欲貪戻あり。檀
 越の来る小も財多たれ者ハ縮ハ財少たれ者ハ橋り愚昧の尼老衰と嘆し

錢銀之上を多く己が肉食女犯の代に不如法か一生を送る是の徒觀
音經を生涯續つるふと善男子と云ふ守正道と守まて
佛法王法の旋小背を其身くの業を念を觀世音と信する善男子
若くは無量百千萬億衆生

○若かりくと訓 ○有らあつてと訓 ○無量をうあらず ○百千萬
億とす方の衆生の數限もあらずと申すて百千万億人と限るふもす
○衆生とい衆の生とい申すなり此文は次の文と起ると言たり

受諸苦惱聞是觀世音菩薩心稱名

○受はけると訓 ○諸は多くと訓 ○苦惱は苦
惱むる是前の文及び語にて若數限もあれ衆の生有て諸の
苦惱を受んとす義は但一人の身小諸の苦惱を受るといふはあらず
百千万人も一人く苦惱を受んといふは苦惱あり又いふは苦惱あり
人々小して異同あり苦惱の數も又無量なり ○聞是觀世音と右
苦惱を受て衆生が觀世音菩薩の御名を聞てとす義は名と入
ざるの經文の略なり ○一心稱名と一心とて他念なく觀世音の御名と
稱する義なり一心と三字重くするは一心に重き易く一心に成る物
觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫

○即時と時刻をうづまき。其御名と稱る。其直心といふ義なり。

○觀其音聲耳とハ其音声を觀てといふ。又て苦悩を受へ者ガ

他念なく一心小南無觀世音菩薩助ると稱る其時即時ハ觀音

大士稱る音聲と觀のひてといふ義なり。音も聲も二字ともふると

刻細ふりむ大勢二のふりを音といひ一人の聲といふ。其の響音と音

ともいふ。○皆得解脱とハ皆解脱して得るといふ義なり。觀世音名

殘稱る者の其音声を觀のひて大慈大悲の威力を以て救ふが如皆解脱

て得得せざるをたなり。○解ハゆると訓脱ハゆると訓。緒の苦悩をゆる

煩惱の迷ひたんとハ弊當と解と破衣と脱と。菩薩の功力あり

助ると解脱と。いふなり。亡者の成佛と。と解脱といふも。即ち意なり

○陰德太平記曰天文二十年八月周防國主大内義隆乃臣陶

全姜謀叛と起ると主君義隆の館へ押寄て攻まらば義隆御

々更能ふと愛ま女たふらと兼て都の乱と避る大内家小倉居

せ公卿尹房公頼良豊以下其外近習亦と引連て館へ落船小

と兼長門國へ落行多ふ海上おく俄小悪風吹出ると浪山の如

くお来て帆柱折楫確て船すふ西復んると船中の上下大の致

死強今や底の水屑と成ると生る心地もあろうと。小則開白尹

房公も兼て洛東清水寺の觀世音と信仰し朝暮台心りか。普品

と讀誦し。いふ。此時一心を凝し高聲小普門品と誦し。小或

漂流巨海龍魚諸鬼難念彼觀音力波浪不能没の文と讀

大内義隆観音と
念じて難風と免る



時より漸く小風あは浪あがり船中の男女必死然免る船安
と長門國(者)と云えんが四苦八苦いふ及そと地獄畜生餓鬼修
羅の大苦患を受るも観世音の名号を一心に称するは菩薩其戸小
應じて助りの皆解脱を得るも疑ひあるがず

若者持是觀世音菩薩名者設入大火火不能
燒由是菩薩威神力故

○佛無不意不告の語かり所の文小諸の苦惱と許して未だ苦惱の
品と奉るは此文より以下小七難解脱の義と説くはかり七難と六〇一火
難〇二水難〇三風難〇四刀杖難〇五鬼難〇六枷

鎖雞 ○七 惡賊難行。茲尔先火雞の更と説り。○若り六

○右のあをといふ。○持はると訓觀音の御名を受持り。此持は義

あを口ふ稱は誦持といひ心念念を兼持といふ。○是觀世音

菩薩名者すと云ふ。此心若觀世音菩薩の名と持者有ると

ふなり。○設たといふ。○入大火の火入ると云ふ。○火不能焼と

火も焼く不能といふ。○由是菩薩威神力故といふ。是菩薩の威神

力由故なりといふ義なり。○威神力と觀世音の功德の力天魔鬼鬼も

悉くたす。毒龍惡獸も降伏し水火も溺し焼く鉄も廣大無辺なる

とて威神力といふ。偕此段の意は若觀世音菩薩の名と持り有ん

者ハ設たなる火の中入ると火も焼く能く是菩薩の威神力由故なりと

○或人曰觀世音菩薩の名と持ち念ぶる者ハ火雞不遭ヤト云々

然小此文ハ菩薩の名と持者ハ大火入るとあるハ何故と難と云て曰

成なり平日ハ觀世音信仰ハ他念なく一心ハ御名と持念ぶる者ハ火雞ハ

遭り有難くも然も信者思愛の迷ハ心亂と又も不圖欲心萌

思ふと信心怠ると不時の火雞ハあま更なり。その時以前持ち

觀音の御名と思出。信心の怠りを悔し一心ハ御名と稱念ぶ其火

難と免るなり。又義なり。又信心堅固なり。前生の業小因て一旦火雞ハ

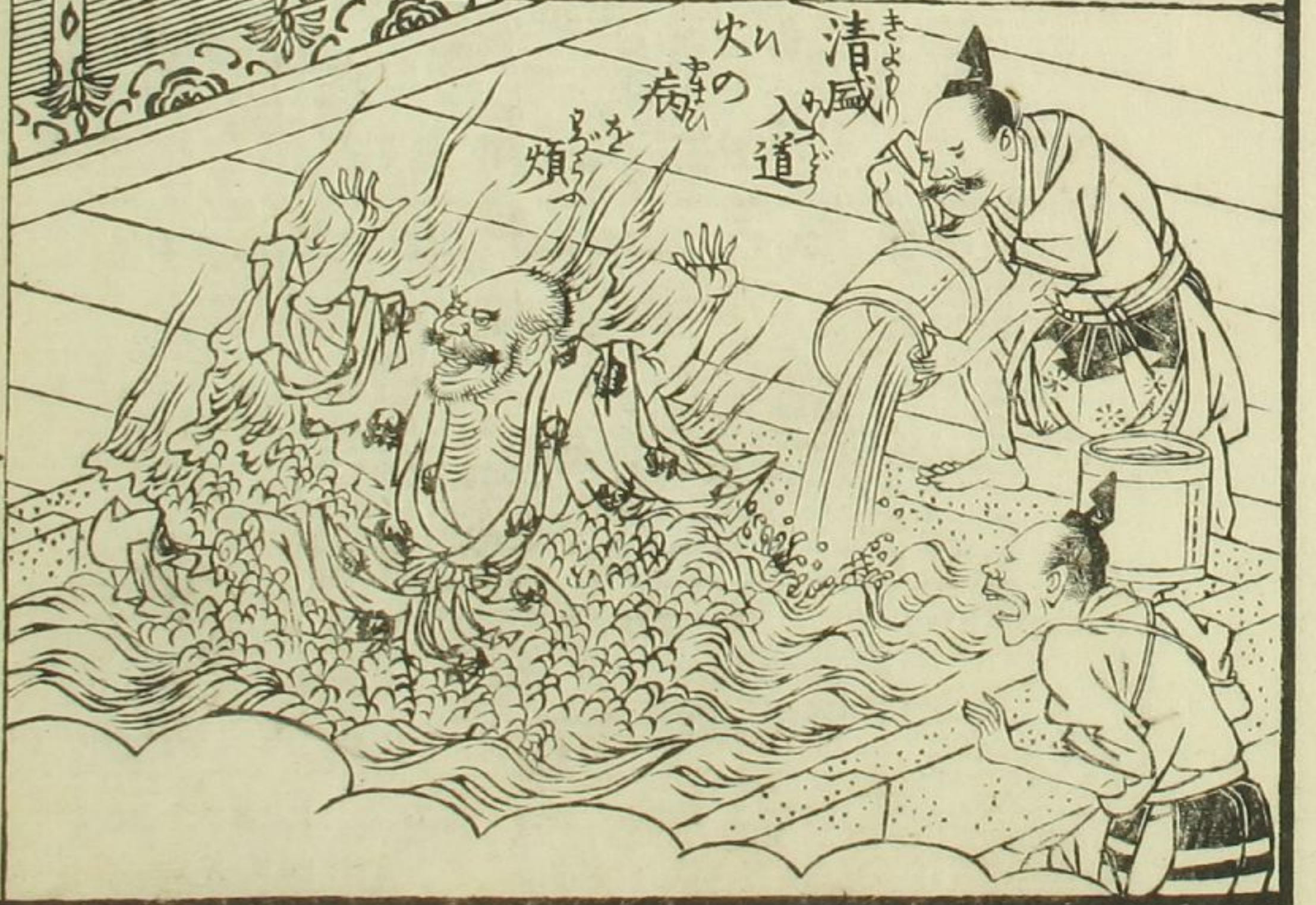
遭り有るも左様のとて觀音と念ぶ菩薩の威神にて火雞と免

と。そのゆゑなり。但尋常の火雞ハ猶防が易し。凡夫の身ハ業火と

て防が難し。火身内より燃出く其身と焼なり。業火ハ瞋恚と

心姦く人を嫉む恨む身内より火を生ト今も積善根と焼尽
 現世の鬼となつ終つ其業火の為小身と焼きて死するなり大和物語
 小物とねむ女あま胸熱く堪がうと搜子小水とておれく其永湯
 となるとあつ是瞋恚の業火の為小沸なり註曲の釣小も瞋恚乃
 焰の身と焦すと書言又源平盛衰記大政入道清盛火の病と煩ひ
 とあるも瞋恚の業火身の内より燃て其身と焼亡せなり傳小東寺
 洪福寺なる大迦羅と焼亡せ佛罰のぞく其根本頼朝の東園小
 旗を揚義仲の北園小起り其他諸國の源氏蜂起して普代思顧乃
 輩や平家小叛源氏小荷擔とて清盛瞋り其心り遂小其
 身より瞋恚の業火燃て身と焦く狂ひ死とあつるなり作清盛

其未だ若る時身貪りつるも
 小或僧の教小徒の毎日法花經と
 續編とるの数年怠む其功
 小て進く身し遂小日本六十分
 國の内過半を領する身とかり隱
 戸の迫門を切通して西海通路の道
 小用兵兵庫の築嶋を築く横
 津と天下乃大都會と或宮嶋
 の神殿と造堂或高野の佛堂
 と建まると種の大善根とかり



富貴と特で心憍り忽ち佛の戒と忘る。帝王と困めると惡逆增長し
るれ三宰も見放しゆの遂に業火の為に燒殺されぬ清盛とて法花經
の信者なりと觀音の功德とも知其御名とも持つるれも惡業乃大
火に遭り此時心小悲と悔て惡と翻し一心小觀音と念しゆも定業乃死
免れども業火の苦患に解脱を不願志の為に心顛倒し觀音乃
威神力と頼るも更にもお忘る狂死しゆもなり。されば觀音の御名を持し
人惡業煩惱乃為小菩薩の大慈大悲と心と火難小遭とも宗懺悔
し一心小觀世音と念しゆも其音小應じて火難と救ひんとなり

若為大水所漂稱其名號即得淺處

此段七難の中の水難と免る更と説くはなり。それ小水難とかなど

大水に人命と害す更火より甚しけれ小大水の難と奉る也。○若為大
水所漂とハ若大水の為に小所漂しと云更なり。○漂はたよと刻て水
小波浮つ沈つてもと漂と習り。○稱其名號とい其名號と稱ふむと
の義なり。○即得淺處とい其時と云ふ淺處と得るのと云ふなり
即ハ時刻と云ふまじき其時と云ふと云字義なり。○唐の聖善寺乃僧道
憲といハ人と法徳勝と常小觀音菩薩と深く信しゆも小刺史元と
い者觀音像七幅と畫んを欲し道憲が徳の高さを以て是を頼と
たれ道憲諾て齊戒し觀音の像七軸と描た彩色の丹青小膠と
用ひて乳頭香と和し遂に畫畢て史元小すれを史元大悦びて

深く重宝一々。其後道憲顔寧と云所小到て文殊堂を建す。功畢て日侶とも小飲る路かて。二の江を渡る小道憲過る水中へ没るを日道の僧大よかき是を扶上んとあせれども。水の流急く遠く流を行きおど助んきもたうる。然小道憲水小溺を承り一心小觀世音と念下るる亦や少くも苦と覺む。水底をんれを前小畫し七觀音の像光を放て並びまの道憲信心増し猶も善菩薩乃名号と心小稱へるる。うう身体輕かり水上へ浮上り。これ岸の辺なるか頭て陸へ上り助るる。今小至る唐王大雲寺小右の七觀音の軸を傳來し。道憲水小溺し図をも別小畫て其靈驗を結すと云の鏡。持繪紀。され即得法所の妙文遠く廻り不思議の御利益あり

若有百千萬億衆生為求金銀瑠璃車乘

馬磬珊瑚琥珀真珠等寶入於大海

此段ハ七難の中の風難と免る義と鏡の事。○若ハ一。○有ハあつてと云ふ。○百千万億ハ前小如く數限かたぬ。近く又を難と云ふ。○衆生ハうろくの人と云義。○為求ハ求人為と云。○金ハ黄金と云其色黄なるを以て号し七宝の隨一。○其德銀銅鉄其餘諸のろ小勝るいうれ久く土中埋れても錯と生ぜど同方小緒の金より重し。○銀白銀と云色白きを以て号し

南方より出るとの至て美是と南鏡といふ鏡は去るものと刻○瑠璃
 と玉の類なり其色青○碑瑤は天竺の玉石なり其色白く青く
 漢小貝小車珠と稱る物あり別種同名なり○馬碯玉石なり色ハ
 青赤白種あり馬の腦小似る名と○珊瑚八震且大秦乃
 西南七百里瀾一海底の石小生ると玉樹なり枝多く有て葉ハ
 大なるハ五六尺小なるハ二尺色と赤た物と貴く黄た物又青た物
 有八月十五日の夜かごと取むると○琥珀其色赤黒くして透
 通り光澤あり松脂地小入千年と徑て茯苓なり茯苓千年と徑て
 琥珀となると縵り○真珠ハ海中小生ると珠なり藥小用ると辰虫珠
 とて貝の腸小有るとれハあまも貝の類の珠なり以上七種と七宝と

但一諸経小挙る所の七宝少く異門あり○等ハ一と刻七種
 の等とり義なり○入於大海とハ大海と渡り七宝の有國ハ行
 戎の海中ハ入ハあまも次の文ハはけてるを

假使黑風吹其舩舩飄墮羅刹鬼國

○假ハたと刻前の設の字と同○使黑風とハ黑風と使とい義
 かり使の字ハ二度ハむ字なり板風と色カハ然小黒風とハ如何とい
 小里砂と吹まると以て黒風といハ又黒雲と吹捲ゆハ黒風ともい
 ○吹其舩舩とハ其舩と吹てとい義なり舩舩ハ舩と字ナリ
 ○飄墮とハ吹流さるるなり○羅刹鬼國とハ鬼の住國なり但一

鬼小二種あり。ハ羅刹是と食人鬼と。人の屍を喰ふ鬼なり。二小を
 夜叉是と捷疾鬼といふ人の精氣を噉て死せしむる鬼なり。皆海外
 とて世界の端小右夜叉羅刹の住國ありと。次(續けて)云々
 其の中若有乃至二人稱觀世音菩薩名者。是諸
 人等皆得解脫羅刹之難。以是因縁名觀世音
 ○其中若有乃至一人。其中小若乃至一人。其義あり。稱觀世音菩薩
 薩名者。とハ觀世音菩薩の名と稱者。あつたり。其の義あり。是緒
 人等皆得解脫羅刹之難。ハ是緒の人等皆羅刹之難を解
 脱。了んを得ん。其の義なり。○以是因縁名觀世音。ハ是因縁を以て

觀世音と名付るとあり。此段の意ハ
 若人有て金銀以下の七宝と求ん
 ず。其友とて。其船小乗て大海を
 往小惡風吹て船を羅刹鬼國吹
 流さん。己小噉さん。とまると。船中の
 人の中。乃至一人觀音菩薩の名
 と稱る者有。其人多く及む。手
 諸人。中も小羅刹之難を解脫す
 と得る。是是因縁を以て觀世音
 と名るとの義なり。又觀解乃說



觀音經和訓上

佛法ハ善室ナリ。世の人是と求んとす。小煩惱の悪風吹起りて生
死の海小飄り。諸の悪業と造りて地獄に墮ると羅刹之難小
喻しともいふ。何と云へも觀世音の御名と稱ふを其音と觀
て解脱し其因縁と以て觀世音と名るとなり

若復有人臨當被害稱觀世音菩薩名者

彼所執刀杖尋段段壞而得解脱

此段ハ七雜の中の刀杖雜王難と免る免る更と鏡鏡を交なり。○若復とハ
と又とハ義。○有人臨當被害とハ人有て害せらるるを臨臨といふ

○稱觀世音菩薩名者ハ菩薩の名と稱る者との義。○彼所
執刀杖尋段々壞而得解脱とハ彼執執の刀杖が尋で段々壞
て解脱し其得得と云ふ此段の意ハ人有て刑罰小遭く又と害せられ
んとする時小臨て觀世音の御名と稱ふを彼斬んとする者の執所の
刀杖尋で段々壞て解脱しと得となり。刀杖と劍のヲ尋とハツの
刀が折れ又刀とより替て切ふ其刀も折又刀と替て切ふも折れ又
折るもと段々壞壞と云ふ。俗に云ふ折折といふも段々の意
解脱ハ前小述るごとく。○昔吳人陸暉といふ者國の提提を以て
斧斧を罪罪扱扱りて曳出され刑吏陸暉が首と斬んとす。小劍三段
小折り是ハ又のあ糸と云ふ。劍とより替て斬ふ其劍もなれ



日蓮上人
辰の口
向難

又替も折尋で三方が折
 々小と檢名の官吏怪陸暉小
 向の如何なる邪術を行やと
 問陸暉答て我曾て邪術を行
 ひいぞ但し多年觀世音と信
 寸八分の銅像と鑄より髻の中
 小結管電みいひが刀の折し若觀
 音菩薩の利益ふてもやゆん
 いふも小より官吏陸暉が髻と解
 せんも小果して觀音の銅像ありて

其首小三方の痕付り官吏狭
 感に國王其由と奏しは遂
 陸暉が罪を免し命と助し
 又吾朝の日蓮聖人と法花宗と
 弘通ありたる小或人北条定時
 説言して是邪宗なりと告し
 定時実なりと其の辰の口て
 と断罪を行へんと日蓮聖人
 単の上小申居られおがし
 経を續編し内刑吏頓て後



行合の川

観音經や川上

三十三

小廻リ太刀振上々々小聖人猶一心乱ど己小普門品と續編一
の刑吏よりけりも聖人の御首と殺止と斬ふ死も石と切が如
く太刀三段折より是如何と太刀と替て再び斬ふ日三
段折に檢使怪し是佛菩薩の護念も入たぐり太刀斬ん
とせむ却て佛討て蒙るる。此奇特と鎌倉往進し聖人の命と
助を今とて告文と書て早馬と鎌倉近行しむ然小鎌倉小
此日天変頻たりは是日蓮と刑を行くとると天の怒りよたぐりと
て日蓮助命の免状と持せて急馬成辰の只地到しむる小双方の使
者途中にて往合其処と是より互小使者の趣とる。鎌倉の使者を
辰の口より告文と受取辰の使者鎌倉の免状と受取互小取

替てえへ引返し遂小日蓮上人危れ一命と助は法花宗と天下小弘
のり。是吳人陸暉が故事と日目の談にて倭漢國異かりとる
も觀音の靈驗はうりゆらず。刀杖尋段々壞の妙文信なるか
若三千大千國土滿中夜又羅刹欲來惱入聞
其稱觀世音菩薩名者是諸惡鬼尚不能
以惡眼視之况復加害

此段六七雜の中の鬼難と鏡の事○三千大千國土と云鏡のあれも通
くして此世亦有とある國土といふ義にて三千と數の限り小あらず

○満中夜又羅刹欲未惱人と三千大千國土の中あつちのくにに満みみるあふ地あどもが
きて人と惱あやまさんと欲あつすとよるなり○聞き其その稱なより名な者ものまで○
音おん菩薩ぼさつの名なと稱なると聞きむと以も義ぎたり○是ぜ諸しよ惡あく鬼きより況け復ふ加か
害がいまじくおの是この諸しよの惡あく鬼き由よ尚なほ觀くわん世ぜ音おんの名な成なり稱なる人ひと尚なほこれと視みこと
能あたむいん況け復ふ害がいと加かへるより能あたむことなり○夜や又また羅ら刹せつハ前まへの述のぶごとく
人と噉くつひ人の精せん氣きと吸すること惡あく鬼きにて人と惱あやま佛ぶつ法ぽうと妨さげふ國くに土つち
の中ちゆうに充みみ満みるといふも凡ふん夫ぶの目めのくふ此この惡あく鬼きども佛ぶつ道どうと信しん仰やうし心こころ
正ちやう直じきにて諸しよの善ぜん根こんとたも人の惱あやまも能あたむことなりも信しん心こころ薄うすく欲よく深ふか
た人ひとも六む女にょ色しき不ふ耽たんる人ひとも其その魂たま入いり種しゆの惡あく業ごうと造つくること終しゆう小せう
壽じゆう命めいと縮ちぢり妖よう死しをせて地ち獄ごくに墮おちりむことを惡あく心こころ萌も貪とん欲よくの心こころ起おこり

道ちゆうありれん不ふ意い慕ぼの心こころ生なむ人と争あひあ瞋しん恚い心こころの出いること比ひ皆みな信しん心こころの薄うすた虚うそへ
付つてて右みぎの惡あく鬼きどもの魂たま入いり罪つみと造つくることありことを朝あさ夕ゆふ觀くわん世ぜ
音おんの御おん名な成なり稱な信しん心こころと人ひとと惱あやまと惡あく鬼きも眼まなこ不ふ視しと能あたむこと同おな小せう
人ひとの更さらさ叶かなひこと増まへこと況け害がいと加かへること更さらさ尚なほ能あたむことなり
設せつ復ふ有あり人ひと若し有あり罪つみ若し無なしこと無なしこと柵さく械け枷か鎖さ檢けん鼓こ系けい其その身み
稱しやう觀くわん世ぜ音おん菩ぼ薩さつ名な者もの皆みな悉しつ斷たん壞わい即すなはち得え解げ脫だつ
稱しやう觀くわん世ぜ音おん菩ぼ薩さつ名な者もの皆みな悉しつ斷たん壞わい即すなはち得え解げ脫だつ

此段ハ七難の中の枷鎖の難と説く○設復有人若有罪若無罪とハ
設復人有て若ハ罪有也若ハ罪無也といふ義なり或人曰罪有者の

繫るゝ勿論あれども罪無者の繫るゝと如何と答て曰是罪無とも
辨言来て無実の罪と得又連坐せし逢て繫るゝ以縲なり

○柵械枷鎖檢繫其身とハ柵と手と械ハ脚と柵ハ首と鎖ハ
身と繫るゝ鎖なり檢ハ封と付るゝ。繫るゝ去むる繫るゝのて。右等乃責

道具ハ其身と縛るといなり。○称觀世音より新壞即得解脱と
ハ菩薩の名と称あむ。右の柵枷ハ皆悉く斷壞て即ち解脱を

得るゝとの義なり。○平家の侍悪七兵衛景清ハ多年都清水寺に
觀世音と信仰し門滅亡の後も尾張國ハ身と潜て屢歩踏まると

右大将頼朝南都の大佛供養せると聞われ頼朝と討て平家門
の仇と報んとんと衆徒の次身と紛装し東大寺の場と徘徊と祈ると

々々小畠山重忠是と異と此處で發誓固の士平大勢ハ命じて生虜せ
捨えぬと平家の侍景清なり。諸ハ主君頼朝公とねむる小社と

重た囚人との殊更強勇の者あれとて柵械と入其上鎖と以て
嚴く獄中の繫るゝだれも。景清ハ本意と遂とて残念と思へども

是我武運の尽る期あれ難と恨むる只後世の罪障と救いぬ
と清水寺觀世音と祈念し牢内ハ繫るゝれがら日夜普門臣と續

誦し已小三千遍ハ及ぬ。然る或夜牢内ハ光明曜々なり。景清
ハ牢外と入れ空中小雲とあびき。其中ハ觀世音菩薩

光と放てるふゆと景清わ難有やと稱迄手と合とて拜ると
おの心を忽然として夢覺ると。諸ハ夢かりると夢ハ不思議

あつらふ鎖とまて捨せ

抑械その封乃依り

自ら拔落すも小

強く敲系鐵の

鎖もろまりて身と

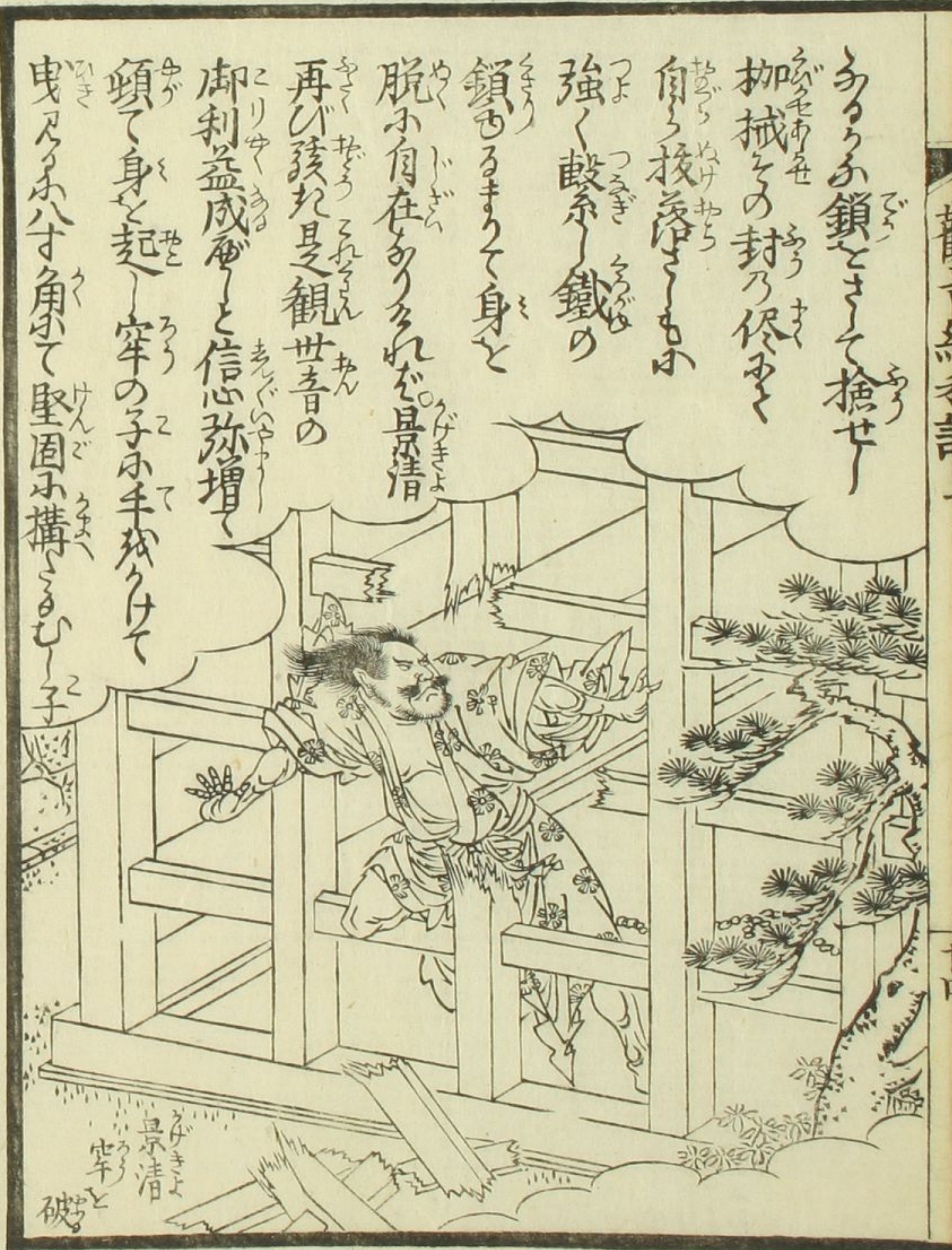
脱小自在ありをれを景清

再び孩れ是觀世音の

御利益成ると信心弥増

頭て身と起一牢の子小半成りけ

曳スル八寸角小て堅固小構もひ子



カとも入らふ折壊を安くと牢と脱出多ふ多く乃監卒ハ孰睡
て是と知と咎る者もあつらふれバ遂小虎口と脱去多ると滅小皆悉
断壊の功力空一々も難有る一御利生たり

若三千六千國土満中怨賊有一商主將諸商人

齋持重寶經過險路

此段七難の中の怨賊難ハ脱りて○三千六千國土六前ハ脱が

○満中怨賊と六三千國土の中ハ満る怨賊より義なり死心とハ人殺
して其人の財産と奪とる者とり賊とハ人を殺とせとあハ及されも人の

金銀衣服と盗む者といふなり○有^ら高主將諸商人と二人の商主
有^らて諸の商人と將といふなり○齋持重宝とハ齋ハもすも持
ハ負^つ持^つ重宝價貴た貨物のもの○經過險路とハ經過ハ路
と通り往^つる險路ハ山坂たの險た路といふなり所ハ山賊追利
かゝの住^すものたれど商人たどハ然賊不逢ん^と怖^そものなり

其中人作是唱言諸善男子勿得恐怖汝等

應當一心稱觀世音菩薩名號是菩薩能以

無畏施於衆生汝等若稱名者於此然賊當

得解脱衆商人聞俱發聲言南無觀世音菩薩

薩稱其名故即得解脱

前文の續なり○其中人作是唱言と前よりハ大勢の其中ハ一人の者
是唱と作^つて言^ふといふ言^ふて次の文と起^すこと○諸善男子勿得恐怖と
と各恐怖^す勿^すこととハ義なり此善男子ハ佛道の信者といふも非
ど俗^に各^々方^々といふにハ恐怖ハ二字ともおそれると刻^し勿^す得^ずとハ心^を懷^く
る勿^すれといふにハ○汝等といふの○應當一心稱觀世音菩薩
薩名号とハ當^り不^し觀世音菩薩の名号と稱應との義なり○是菩薩

能以無畏施於衆生とは是菩薩能無畏と以て衆生を施すといふ
 とつ義なり○汝等若稱名者於此怨賊當得解脫と汝等觀
 世音の名と稱あむ此怨賊の難小於て當小解脫と云得べしといふ
 ○衆商人聞俱發聲言南無觀世音菩薩と右人の者乃勸
 を衆の商人が聞て大勢俱小南無觀世音菩薩と言んといふなり
 ○南無とハ梵語にて畏謨といふ南謨といふは即ち又諸の眞言
 の上小悉く之の字と書も南無といふ義なり南無と翻譯とれ
 と歸命といふ義なり此歸命といふ字義説くあれども中も耳近に歸ハ
 順なり命ハ命なり是佛の命小歸て諸の善根とて諸の惡事と致す
 まると佛小誓とて歸命といふなりされ佛菩薩の名号と稱るハ

必と南無の二字と唱へしと又善導大師曰南無ハ歸命にて
 又ハ發願面向の義なり吾國の神祇の御名と稱ちり拜礼とるものなり
 南無天照皇太神宮南無春日大明神と皆南無の二字と先唱ると或人
 突ひて日本の神の名と稱る小佛家用も天竺行と唱ると氣毒と辨
 せしとも左小あむと神道小南無の字と用る時ハ正直正路と守るべし神乃
 命小歸ると誓言の末に僻言小あむと歸命の字義豈佛法小限らんや
 彼と執て是小用るハ世のあむあり但歸命と奇妙の義と思ハ非なり
 ○稱其名即得解脫と其名と稱る故小即ち賊難と解脫するを得
 といふなり物思ひて此段の意ハ三千大千國土の中小怨賊満る人一人乃商
 人の頭領が有て諸の小商人と將て價貴た貨物と人小齋せ我も持て山

坂さかの險路けんろを經過けいごうんん怨賊おんぞくの難なん也や遭人あひま衆危しゆゑ怖おそるこ
大勢おほしの中なかの者もの是こゝろ唱なと作あて言い善男子ぜんなんし恐怖おそと得えと勿なし汝等にんら
當あふふ心こゝろ小觀世音菩薩せうくわんぜんびつの名号なごうと稱なづべ。是こゝろ菩薩ぼつさつハ能無畏よくおその
誓願せがな力ちからと衆生しゆじやう小施せうじのふれむ汝等にんら若彼しやくは菩薩ぼつさつの名なと稱なづべむ
此こゝろ怨賊おんぞくの難なん小せう於おて解脫げだつとて得えと衆しゆの商人しやうじん聞きて皆みな俱く小
南無觀世音菩薩なんぶくわんぜんびつと言いんん其その名なと稱なづべむ故ゆゑ小せう即すなはち解脫げだつとて
得えとの義ぎなり。但しかし是こゝろ段だん於おて七難しちなん終はる

無盡意觀世音菩薩摩訶薩威神之方魏々如足

是こゝろ七難しちなんの惣結そうけつの文ぶんなり。○無盡意むじんい菩薩ぼつさつハ觀音くわんおんの功德くつとくと佛ぶつ少向せうかう

なるなる發起おこかるかるる名なと呼よぶぶなり。○觀世音菩薩くわんぜんびつ摩訶薩まかと觀くわん
音おんと誓ちかひの言ことばなり。摩訶薩まかハ具そふふの摩訶薩まか増ぞうふれども今いま增ぞうの
字じと省しやうの經文きやうぶんの略りやくなり。摩訶まかと釋しゃくとれハ大おほなり。薩さつ増ぞうと釋しゃくとれハ道心だうしん
なり。されば摩訶薩まかハ大道心だうだうしんといい義ぎ於おて菩薩ぼつさつの中なかにも殊ことごと更さら功德くつとく乃すなはち
勝まさとする大菩薩だいはつさつと誓ちかひなり。それ道心だうしんといい六む方はう德とく田でん満まんして衆生しゆじやうの
為ためふ不可思議ふかぎの功德くつとくと施せのの大心だうしん清淨しやうじやうの菩薩ぼつさつといいわるる未ま世せ小せう至し
りて人ひと拙せつ法ほふ衰すい名な義ぎお昏くらかり。其身そのみ不具ふく生まるる或あるハ魯鈍ろとん下
根こん也や。官仕くわんしと懶らん耕作くわうさくの業ごう中ちゆうの堪かんと商賣しやうばいも得えせむと職業ごうごふハ
も根こん薄はく。人ひとの意いれ世よ小せう疎そ中ちゆうの妻子しよしと養やしやうふ力ちからなり。是非ぜいひハ髪かみ交かう
と剃し破衣はふと身みの纏ちんひ結縁けつえん方便へんぱんの頭陀行だうたぎやうの中なかに家いへの門かどに立たち

心の中あはれ念佛題目と稱て手銭とて手の隙かてよまふ
悪口雑言と極く族と維が然りて道心者と呼ぶ人笑ふ絶する
○威神力の前注とて〇巍々たる高く累る形ちと山の高く

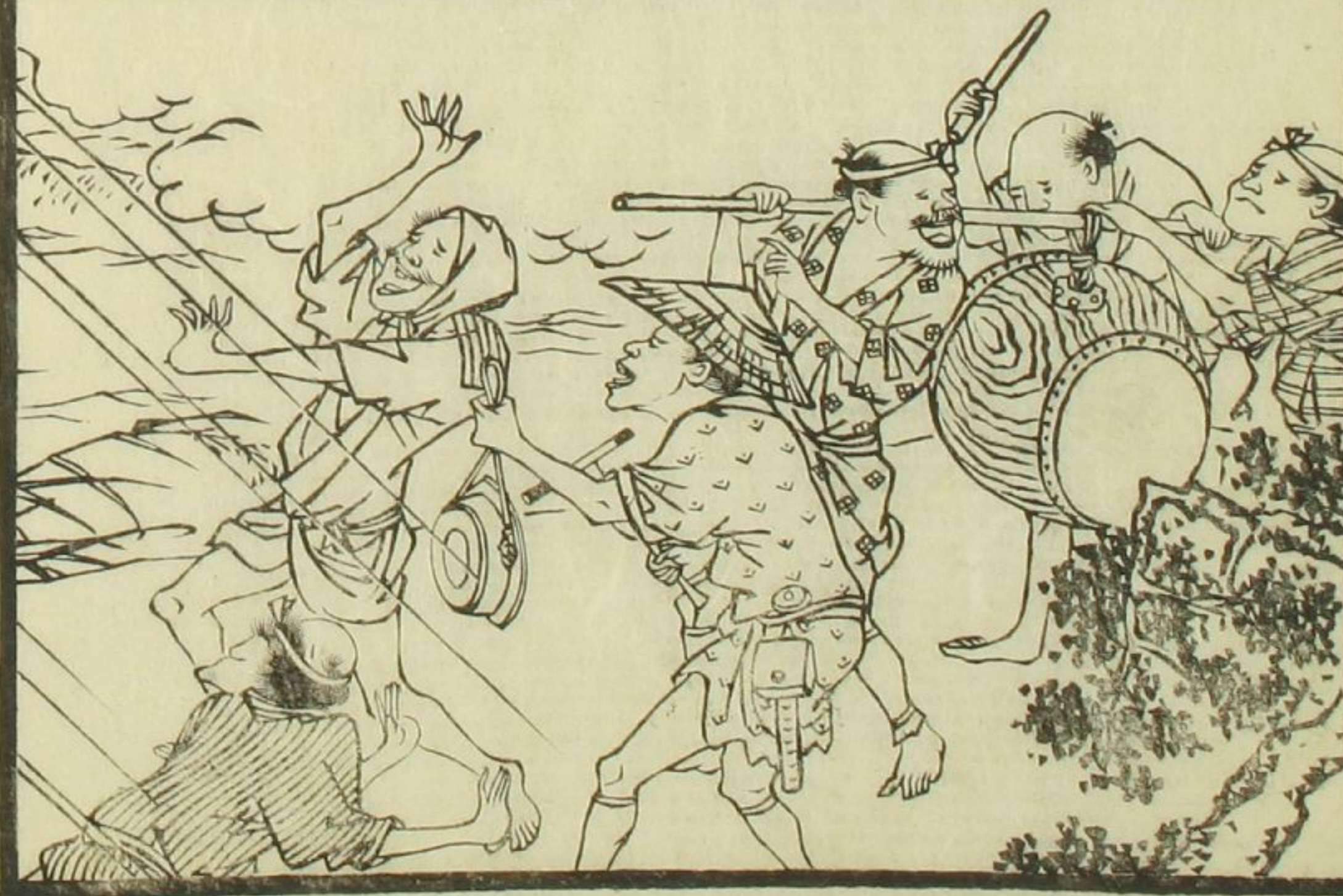
累るもの又八樓閣の高れ形たんと巍々たる〇觀世音の功德乃
力の高く勝れんと譽て巍々たる宣り〇如是八具の〇とてよまふ
若右衆生多於娼欲常念恭敬觀世音菩薩便得離

離欲若多瞋恚常念恭敬觀世音菩薩便得離
瞋若多愚癡常念恭敬觀世音菩薩便得離

此段ハ觀音の功力ハ三毒と離る義と説くハ人間の善心と
妨げ暗や一甚く其身と亡て以て毒と云。字彙ハ毒ハ害也痛
也とあり。但一三毒ハ單の三毒復の三毒とて二義あり。單の三毒ハ
貪瞋癡の三と復の三毒ハ娼欲瞋恚愚癡の三と綴り。茲ハ
復の三毒と説く。〇若右衆生多於淫欲とハ若衆生有て娼欲

の心多しんおのり〇常念恭敬觀世音菩薩便得離欲とて
常念にて觀世音と恭敬せむ便欲と離るとなり。〇恭敬ハ二字
ともやナシと刻但一少く字義異なり。韻會ハ貌ハ在と恭
ととありて衣服と整ハ貌と正とてやまふを恭とす。心
ハ在と敬ととありて心正と信とてやまふを敬とす。孔安國

曰恭敬ハ上事以所也云々其貌
 と共ホ一心信とスルと常ホ觀世
 音と敬ヒ念ゼバ姪欲の念と離
 のふとナリ。それ姪欲とハ女の色ホ迷
 忠孝の道と志スル家業と棄テテ
 女の愛念ホ心と湯ヲシテハ女ハ親
 の許サレ密男を没ケ或ハ夫有身
 他ノ男と密通スル類と姪欲とも又
 邪姪ともシテ現世ホテ主親の意
 小淫ハ朋友怨意の義と破リ終
 末



家業と廢一身亡一死一六地獄
 墮無量の苦患と受永劫浮世
 期。是不信心より彼夜又羅刹ガ
 其身の魂ホ入替テ姪欲と熾メ身
 と亡キ一むるナリ。昔備中國松山竹
 の莊ホ真田基トシテ者ノ妻或山伏
 と奸通一夫の目と竊テ忍逢る日
 久一ウケテ或時夫兩人ハ密會と
 見露一山伏と追拂ヒ妻と強ク呵
 耻メタレバ妻ハ忽チ氣とシテ



狂乱きやうらん由よしあれと言い罵のしりて狂くるひ廻まりたるなり。とてあまりて宰さとまつふ
入い置まるふ益えき狂きやうの吼こゑ。日ひ戎じゆう往むかふ顔かほ恐おそく愛あい下くだ眼まなこ鈎かぎ上あり只ただ耳みみ根ね
ままく裂さ衣い長ながた牙きば生な髪かみ逆さか立た生いかう蛇へび身みとなりたれ夫をと首くびと家うち
内うちの者もの怖おそまりてい者ものわり。諸しよ人にん是こゝと聞傳つたて日ひみ見みふ集ある者もの市いちのうち
然しか小こ鬼おに女にょ緒よ人にん向むかひ我われ此こゝ邑むら端はたの池いけの主ぬしと成なる。汝なんぢ等ら我われと此こゝ宰さよ
にい出い。鉦かね太たい鼓こをた唯ただ一ひと彼かの池いけにい送おくれよ。我われ望のぞむ叶かなむを此こゝ里さとの者もの
一ひとも残のこまりと魁くわい殺ころす。一ひと郷ごうと池いけとなすを宰さと旬てまと夫を及および諸しよ人にん恐おそれ
望のぞむを宰さより出い。鉦かね太たい鼓こをた唯ただ一ひと彼かの池いけにい送おくりを往むかふ途ちゆう中ちゆうよ
にい俄が小こ大たい雨う降ふ出い。四方しつぱう大たい黒くろ暗あんかりたるを諸しよ人にん驚おどれ怖おそれ皆みな凶あや飯い
り。彼かの鬼おに女にょ池いけにい入いるを否いなや行い方かたまりとあり是こゝ正せい保ほ二に年ねん画がの六む月げつ

廿八日にじゅうはちにちの更よりかりとは是こゝ媼おん欲よくより生いかる鬼ま畜ちゆうとなりたり。此こゝ他た謡うた曲ぶつの
金輪こんりんの女にょ日ひ高たかの真ま卿しやうの庄しやう司し娘むすめ多おほく媼おん欲よくの為ために蛇へび身みとなり者もの倭やまと
漢かんとも其その例れい多おほく。六む媼おん欲よく萌もむ。是こゝ夜や又また羅ら刹せつの障しやう碍がいとなりたり。と
思おもひ早はやく觀くわん世せ音おんと恭こう敬けいと念ねんをた念ねんをた善ぜん薩さつの威い力りきをた媼おん欲よくの思おも
念ねんと離りのめをとかり。○若わ多た瞋しん恚いより便べん得とく離り瞋しん恚いよりなり前ぜん文ぶんとなり
意いひて若わ瞋しん恚い多たく人にん者もの常じやう念ねんと觀くわん世せ音おんと恭こう敬けいとなり便べんらなり瞋しん恚い
と離りるをと得とくんとなり。○瞋しん恚い二字にじともいいると訓しんめと心こゝろ殺ころむ性しやう嫉しつ
心こゝろより瞋しん恚いも心こゝろ生いむ。是こゝ善ぜん根こんと燒や失しつ火くわ火くわかり。俗ぞく小せう修しゆ羅らが燃もれ
いも瞋しん恚いの火くわ燃もれ。又また瞋しん恚いと身みの内うちの賊ぞくもなり。經きやう小せう功こう徳とくを
劫きやくる賊ぞく瞋しん恚い過かるをかりとも右みぎ瞋しん恚い多たれ者もの死しして餓が鬼おに道だうへ落お

といふ又人の練を用ひて道小背れ慈悲の心と失ひて禽獸の比たの
 畜生道(隨)るものなり。尚瞋恚の業火の更火雞の段(述)す。

○若多愚癡より便得離癡す。前文と曰く意して。若愚癡多
 りん者常(念)じて觀世音を恭敬せむ。便ち愚癡と離る。更得べ
 しとたり。これ愚の字ハ、まろと刻癡の字ハ、まろと訓む。癡の字とた
 らる。中刻俗ハ無法者となる者といふも癡者なり。抑愚癡ハ三毒の
 根元にて地獄中畜生道の苦と受。一の業より中(磷)だ生(ひ)たりて
 愚癡の人となるといふ。宜(む)むる愚癡心より淫欲の瞋恚も起る。

去(こ)く陳(ちん)西(せい)も年(ねん)ど救(きう)変(へん)もふかぬ愚者(ぐしや)と愚癡(ぐぢ)といふ。あま智(ち)
 ハあれも邪智(じあ)と悪(あく)く。物(もの)疑(ぎ)ハ深(ふか)く邪見(じあ)にて慈悲(じい)哀憐(あへん)を

あま他人(たにん)の憂(うれ)とんて快(こほ)く。他人(たにん)の喜(よろこ)とんて不快(こほ)く。賢(けん)と愚(ぐ)と
 嫉(ねた)む。佛法(ぶつぽう)の正理(せいり)と信(ま)ん。地獄(ぢごく)極樂(ごくらく)無(な)れ。更(さら)なりと看(み)破(や)り。因
 果(か)應(おう)報(ほう)の初(はつ)邊(へん)の虚誕(きょたん)なり。纏(まと)て悪(あく)くと不為(ふゐ)る。たゞ終(つひ)罪(つみ)不
 陷(おち)て眼前(がんぜん)の地獄(ぢごく)落(おち)る族(しゆ)と愚癡(ぐぢ)といふなり。又(また)性(じやう)生(じやう)要(よう)集(じつ)す。

八万(はちまん)の法藏(ほふざう)通達(つうたつ)ととも後世(ごせ)を不知(しらず)とて愚癡(ぐぢ)とともとあり。博
 識(はくしき)の僧(そう)乃(なり)索(さく)ふ。女犯(にょはん)肉食(じくじき)して王法(おうぽう)刑(けい)せらる。も愚癡(ぐぢ)のたこととあり。

殷(いん)乃(なり)紂(しゆう)王(わう)非(ひ)と理(り)小言(せうごん)なり。忠臣(しゆうしん)の練(れん)と拒(こ)して。遂(つい)小國(せうこく)家(け)と亡(な)し。身(み)を
 滅(めつ)す。孔子(こうし)是(こゝろ)至(し)愚(ぐ)也(や)と曰(い)ふ。是(こゝろ)愚癡(ぐぢ)のまなり。又(また)提(だい)婆(ば)達(たつ)多
 とさき。も邪智(じあ)深(ふか)く。邪見(じあ)逞(てい)う。と佛法(ぶつぽう)を邪法(じあぽう)なりと言(い)ひ。諸國(しよこく)乃
 王(わう)と説(せつ)惑(まど)して。五逆(ごぎやく)十惡(じゆじやく)と造(つく)せ。殺尊(せつそん)と弑害(しがい)せん。大地(だいぢ)裂(れつ)て生(な)か

がう阿鼻地獄(墮)由是愚癡より起り無量の苦患を遭り経小
因果の理を信せず愚癡邪見を悪業を造る者と公の父母を害す
より罪大なりと説いて依て觀世音と恭敬と念し愚癡を離るる
○因小日單の三毒より貪瞋癡の三つを貪むむさがるて強欲の
より瞋むむさがる癡はくまふて前ふ迷る三毒と大同小異なり
むん いんぜんぜんがさつうおよぜとうのいんぜんりた
無盡意觀世音菩薩有如是等大威神力多

所饒益是故衆生常應心念

此文三毒を離る事と統むり結りたり○無盡意の名を呼出ぬ
る前の例に比し此末亦有准て志す○有如是等大威神力と

如是大なる威神力有てとらる威神力ハ則チ大略述べれども具ふつを
菩薩の十力といふ事あり一處非處カニ業カニ定カ四根カ五欲
カ六性カ七至處道カ八宿命カ九天眼カ十漏盡カなり如是
十カの上ハ四攝四無畏百三昧解脱無上菩提淨佛國土化度衆
生等の功德と兼備ゆゑ大威神力といなり○多所饒益
饒小利益とる所多といふ義なり饒ハ大なり益ハまことと訓利益
のよりなり○是故衆生常應心念とハ前の大威神力を以て饒小利
益とる所多れを是故衆生常小觀世音と心念とを重しと統
めたり誠小姪欲瞋恚愚癡の三毒ハ身の内の大惡賊なり我
心と以てハ防がう諺小由外より入盜賊を防だ易し家内小ある盜

賊と防たごとく身の内亦有三毒の賊如何にも防た
たものなり其故此三毒常ハ隠れて其身も不知の美女と
を媼欲萌一人と恨るあれを瞋恚起る其根本ハ愚癡と
大毒心残酔湯と故なり如是物も觸て三毒の賊起れ能
心不弁て用心せざれば遂ハ天面の善心と奪るなり去る媼欲瞋
恚愚癡の三毒事小觸てハ八万四千の煩惱の賊となりて身を悪
道ハ陷去らんを滅ハ恐ても恐るるをたかりされ常ハ念ど観世
音と恭敬せむ菩薩の大威神力を拂ひて三毒を離めぬ
現世にてハ無事安穩後世にてハ極樂往生ふさめゆと仰る

観音經和訓圖會卷之上畢

貴むを

